

また買い物ができるようになった――

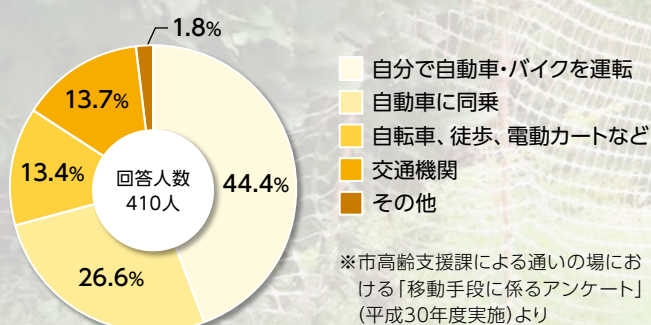
「刺身はまだあつとかねえ」
「今日は何ばしよったね？」

近隣に商店がない、とある山あいの地域。音楽とともに移動販売車が姿を現すと、普段はのどかな集落がにわかに活気づきます。続々と集まる住民。買い物を楽しみながら、会話を花を咲かせます。週に1度の移動販売は、日常生活を支える大切な場。本市で今年から運行が始まった移動販売にスポットを当て、地域の現状を追いました。

「事業に関する問い合わせ先」
農政課農政係 ☎0968(25)7221



買い物手段の割合



Scene 1 背景 買い物に難しい土地

買い物難民や限界集落といった社会問題は、本市でも山間部を中心に発生しています。高齢化が進み、人口は減少。路線バスの廃止、地域生活を支えてきた個人商店の廃業と、食料品や日用品の購入が困難な集落も報告されています。

このような背景を受け、市はいきいき100歳体操を実施する各地域の通いの場で、買い物手段や外出頻度などを調査(左ページ図参照)。26・6%の人が自動車に同乗して買い物に向かっています。さらに、自分で運転して買い物に向かう44・4%の人の中には、運転に不安を感じ免許証の自主返納を考える人も含まれます。自力での買い物が困難な人の存在が浮き彫りになりました。

三セクの移動販売車が始動

買い物支援が必要と感じた道の駅(七城メロンドーム、旭志村ふれあいセンター、泗水養生市場)ときくち観光物産館は、移動販売を企画。補助事業を活用し準備を進めました。道の駅旭志村ふれあいセンターで7月に移動販売車「きく丸号」の出発式を行い、各団体は曜日ごとに運行日を分け、地域へ車を走らせています。

買い物支援にとどまらず、地域コミュニティの強化や見守り活動も期待されている移動販売車。集落を巡る心強い存在に、地域住民からは喜びの声が上がっています。



軽快な音楽とともに販売車が出発しました



Scene 2 届丸

いくつになっても 買い物ができる喜びを――

移動販売によってつながる地域の人たち。
売る人。買う人。それぞれの話を聞きました。

民間のスーパーが実施

スーパーマーケットのサニー菊池店（北原）は第三セクターに先立ち、今年1月から市内で週1回、移動販売をスタートしました。もともと熊本地震の復興支援として、平成28年7月から大津町や御船町の仮設住宅で移動販売を開始。仮設住宅の縮小に伴い販売日を減らした代わりに、新たに菊池で始めました。販売地域は龍門地区の穴川、鳳来、雪野の3カ所。価格も店舗と同額です。全国の64店舗の中で、移動販売をしているのは菊池店のみ。山本一久店長は経費を考えると赤字になりませんが、復興支援の気持ちで続けて

います。お客さんが喜ぶ姿を見ると、こちらもうれしいです」と話します。

三セクは全体で利用増加を

第三セクターの中で、特に売り上げが大きい地域は旭志地区。道の駅旭志村ふれあいセンターの梅本和宏支配人は「販売員と事務員は地域の現状を良く知る地元出身のスタッフが担当しています。地域の皆さんも安心してご利用いただいています」と強みを説明します。「ただ、菊池市の4地域では利用に差があります。移動販売だけで採算を取るのも高いハードル。他の地域を含め移動販売が軌道に乗る

よう改善を重ね、ニーズにあった展開をしていきたいですね」

買い物以外の効果も

「おばちゃん、今日は何が欲しかと？」。旭志で販売員を担当する谷田雄作さんの問いに、女性は「リンゴじゃなくて梨は無かね。あと、来週は調理酢ば持ってきて」と返します。「あのおばちゃん、今週も来てるな。あそこのおばちゃんは最近来ないなって。同じルートを毎週回っているから、住民の変化に気が付きますね」と説明します。サニーで販売している辰巳啓介さんも「用事で買い物できない週は、事前に連絡してくれる人もいますよ。地域の見守り活動にもつながります」と販売以外の効果を実感しています。



山あいの地域をゆっくり走る移動販売車

一方、利用者の女性は「移動販売車のおかげで買い物便利になっただけでなく、外出の機会が増えました。交流も増えて、地域に少し活気が戻りました」と喜びます。別の女性は「今まで買い物は娘に連れて行ってもらっていたの。近所の店が閉まってからは、一人で買い物するのを諦めていました。また買い物できるようになったのが、うれしくて、うれしくて――」買い物支援にとどまらず、地域の交流や見守り活動としても効果を発揮している移動販売。地域に笑顔を届けるために、今日も走り続けます。



買い物袋を肩に下げ、利用者の手をひきながら家まで送り届ける



Voice 利用者の思い



なか はら こそ
中原マツ子さん
(穴川)

地元で再び買い物できてうれしい

かつて穴川で酒屋を経営していたので、自分のお店に集落の人が物を買いに集まっていた。閉店してから地域に商店がなくなってしまっただけに、地元で再び買い物できてうれしいです。穴川は限府から遠い地域。気軽に買い物できない土地なので、地域のみんなも助かっています。本当に感謝です。



たに だ よう こ
谷田羊子さん◎
谷田清美さん◎
(湯舟)

移動販売車が来るのが楽しみ

母は足が悪く遠出ができないので、週に1度の移動販売車来るのを心待ちにしています。家の近くの公民館が移動販売車のルートになっていることから、母一人で外に出て移動販売車を待つこともあります。自分で商品を選ぶのが楽しいようです。今後も継続してほしいですね。

Voice 販売者の声



道の駅旭志
谷田雄作さん
(熊本市／湯舟出身)

地元のために貢献できる仕事

販売ルートにもなっている湯舟地区の出身です。旭志は子どもの頃から顔なじみも多く、親しみを持って話しかけてくれます。一人一人と密に関わることができるので楽しいです。移動販売を心待ちにしている人が大勢いるので、とてもありがたいです。地域が少しでも元気になればうれしいですね。



サニー菊池店
辰巳啓介さん
(熊本市)

大変だけど続けていきたい

車で販売場所に向かうと、井戸端会議をしながら待つお客さんの姿が目に入ります。必要とされているのが実感できるので、大変な仕事だけどやりがいがありますね。移動販売の利用をきっかけに、家族と一緒にサニーへ買い物に来てくれる人もいます。待っている人がいる限り、今後も続けていきたいです。



にぎわう、つながる、
人、地域――

「おばちゃん、また来週ね」
「いつもありがとう。毎週本当
に助かるわ」

過疎化や高齢化で活気が少な
くなっていた集落に、再び活力
を与える移動販売車。全国でも
広がりを見せており、本市でも
新たに参入を検討している団体
があります。

「買い物友達が増えたのよ」
「移動販売に行きたいから、ま
だまだ元気でいらんとね」
これからも地域住民に希望を
届けるべく、走り続けます。

【参考文献】
『ねてもさめてもとくし丸 移動スーパ―
“こ”にあり』水口美穂／著（西日本出版社）



井戸端会議をしながら待つ住民たち。待ち望んでいた移動販売車が姿を現しました

Scene 3 課題と展望

これからも移動販売を 続けていくために――



移動販売の課題として「継続性」や「サービスの充実」が挙げられます。よりよい支援を続けていくヒントを、専門家の意見を交えつつ探ります。

必要なものを、必要な人に

本市の移動販売車「きく丸号」は、徳島県で生まれた移動スーパ―の先進事例「とくし丸」を参考に名付けました。「徳島県」と「篤志」をかけた「とくし丸」は、販売者がスーパ―の商品を車に積み、個人事業者として活動。京都府宮津市でとくし丸の販売パートナーを務める水口美穂さんは平成27年から移動販売を始め、その日常を綴ったブログが書籍化されました。



「とくし丸」販売パートナー
水口美穂さん（京都府宮津市）

て、私はとくし丸を続けています」と声を弾ませます。「商品」を売るよりも、みんなに会いに行くイメージで販売しています。あの人に会えた。この人の笑顔が見られた。そういうことが何よりもうれしいです」

ニーズにあった商品選びとルートの設定も必要です。「1件1件お宅を回り、アンケートをとりました。大変でしたが、今では重要なデータです。お客さんが毎日笑顔で過ごせるように、この気持ちを忘れず取り組んでいます。もちろん商品の管理だけでなく、自分の体調管理も重要です。待っている人がいるので、体を壊さないよう気を付けています」と話しました。

既存の通いの場と連携したい

今年の広報きくち5月号で取り上げた「いきいき100歳体



高齢支援課地域包括支援係
児島由香里 保健師

操」は、介護予防や高齢者の健康づくり、通いの場づくりを目指す。指し進められた取り組みです。市高齢支援課の児島由香里保健師は「100歳体操で健康を維持することはもちろんですが、地域の皆さんが習慣として通える場所を作ることも非常に重要です。継続して取り組むためにも、移動販売車と連携して双方の参加者が増えてくれれば」と話します。

移動販売と100歳体操を同じ時間で連携した旭志地域の一部地区では、買い物物の利用にもつながり売り上げがアップしました。「1人でも多くの人が参加するきっかけになるよう、より多くの地域で連携が進むことが理想です。100歳体操と移動販売がもっと地域に浸透してほしいですね」